

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。ふたりには子どもがいませんでした。それで、いつも子どもがほしいと思っていました。

あるとき、おじいさんが山へ木を切りに行くと、かわいらしいかたつむりが木の幹みきにくっついていました。おじいさんは、

「これはわしがさずかった子だ」といって、よろこんでうちにつれて帰りました。

おじいさんとおばあさんは、かたつむりをだいじに育てました。かたつむりはだんだん大きくなりました。

あるとき、おじいさんとおばあさんは、

「かたつむりをいくら大きくしても、嫁よめをとってやることもできん。ああ、これが人間だったらなあ」と話していました。すると、かたつむりが、

「嫁は、おれがもらってくるよ。おじいさんもおばあさんも心配すんな。おれに、はったい粉こをこしらえておくれ」といいました。

かたつむりは、はったい粉をせおって、村のだんなさまのうちに去了。そして、玄関げんかんの下駄げたにくっついて、

「ごめんください」といいました。うちの人が出てきましたが、だれのすがたも見えません。

「ごめんください」と、また下のほうで声がするので、よく見ると、かたつむりが下駄にくっついていました。

「おう、かたつむりじゃないか。何をしに来たんだ」

「おれを、ここのかまの火たきにでも使ってください」

「そうか、だんなさまにきいてきてやろう」

こうして、かたつむりは、火たきに使ってもらうことになり、いっしょうけんめいはたらきました。

だんなさまのうちに嫁むすめが三人ありました。あるばん、かたつむりは、はったい粉をかついで末すえの娘ねじこの寢床ねどこへ行き、娘の顔や口のまわりにはったい粉をふりかけました。そして朝になると、かまの火をたきながら、おんおん泣なきました。

「おいおい、おまえ、どうして泣くんのだ」

だんなさんがきくので、かたつむりは、

「おれのだいじなはったい粉、だれかがなめてしまったんだ」といって、また泣きました。

だんなさんは、おまえも起きろ、おまえも起きろと、みなを起こしてまわりましたが、はったい粉をなめたという者は、だれもいません。ところが、いちばんしまいに起きてきた末娘の顔にはったい粉がいつぱいくっついていました。

「おまえが、かたつむりのはったい粉をとつてなめたのか」

「ううん。私、はったい粉なかなめてません」

「そういっても、はったい粉が口から顔じゅうについているぞ。おまえにちがいない。そんなやつは、かたつむりの嫁にくれてやる」

だんなさんはそういつて、末娘をかたつむりの嫁に決めました。

かたつむりは、末娘を嫁にもらつて家へ帰つていきました。末娘は、おかよという名前でした。かたつむりは、道を歩きながら、じょうきげんで、

雨ふるな

風ふくな

花のおかよが通る 通る

と歌いました。

家に着くと、かたつむりはおじいさんとおばあさんに、

「おれ、嫁をもらつてきた」といいました。そして、「おばあさん、お風呂^{ふろ}をわかしてください」とたのみました。

お風呂がわくと、かたつむりは、一番湯^{いちばんゆ}に入つて、ワラたたきの石の上に上ると、

「おかよ、おかよ。そこの小づちでおれをたたきつぶしておくれ」といいました。

おかよは、

「そんなこと、いや」といいましたが、かたつむりが、

「いいから、たたけ」というので、おかよは、小づちをそつとかたつむりに当てました。そのとたん、トーンと大きな音がして、かたつむりのからがわれて、中から、りっぱな若者^{わかもの}が出てきました。それからふたりは、幸せにくらしたということです。いつちごさけた

原話：『雪の夜語り―越後の昔ばなし』 水沢謙一編 野島出版

再話：村上郁